



大方あかつき館報

第28号
2018年3月発行

あかつき

第三回文学講座・講演

『言葉に出会ううれしさ』

これは、二〇一七年十二月二日（土）当館三階会議室で開催された上林院文学館「第三回文学講座」での詩人・林嗣夫さんの講演内容です。一時間半余の講演を、後日、講師に文章化していただいたものを掲載しています。

講師

林 嗣夫さん（詩人・高知市在住）



はやし つぐお

- ・1936年 幡多郡十和村生まれ。元私立学芸中・高 国語教員
- ・第17詩集「そのようにして」で、第49回日本詩人クラブ賞受賞
- 詩集・エッセイなど著書多数

ふるさとを離れて

わたしの出身地である十和村は、四万十川の流域、昔は良い道もなくまことに不便なところでした。少し上流域の窪川町は、産業や文化のちよつとした中心地で、それなりにととのった商店街や病院もありましたが、わたしたちの村では病氣や怪我で入院しなくてはいけない時は、たいてい愛媛県の宇和島市まで行ったものです。海の魚も愛媛県から来ていました。そんな山奥の貧しい村です。戦中の満州開拓団という、痛ましい出来事もあり、その話はわたしたち少年の胸にも強く焼き付きました。

地元の中学校を卒業したあと、わたしは故郷を離れて高知工業高校に進学し、多少の紆余曲折のすえ大学を出て教員になった次第です。一家も高知市へ転居しました。

父が営林局を退職してまもなく、故郷に残してきた先祖の墓を高知市へ移すことに決め、親戚す

じの方々を手伝ってもらって改葬の作業を行ないました。掘り起こすのは祖父母、曾祖父母の四体、「林家」はここから始まっています。この祭りの一部始終を書きとめたのが、詩集『四万十川』です。人間の骨を掘り出すのは、ちよつとスリリングな、興味深いことです。王家や貴族の墓なら宝物が出て来るところですが、林家からは何も出てきません。祖母のセルロイドの櫛が一つ出てきたくらいのもので。しかし、順々に骨を掘り出すたび、破片を埋め戻すたび、選びとられた骨（壺）のそばで酒を汲みかわす時、集まった人たちの口からは、死者が生きていた頃のいろいろな様子、できごとが、弾むように語り出され、わたしが祖父母と共に暮らしていた（父母は戦中、朝鮮半島に渡っていた）頃の数々の思い出が、ひとつひとつよみがえってくる、それはわたしにとって、何物にも代えがたい宝物のようでした。

夏の谷川でのウナギ、小エビ、ハヤ。秋のモクズガニ、椎の実。冬の小鳥、薪にする松の幹の香り。早春のミツマタ。肺病で死んだ人を田んぼで焼く話。タヌキに化かされてやぶをさまよった人。カッパの赤ちゃんを身ごもった女の話。谷の奥、森の中から聞こえるあやしい音、不思議な声……。それらは絡み合い、言葉と現実の境目も分からない一種神秘的な物語でした。戦後に国語の教科書で宮沢賢治「どんぐりと山猫」を読んだとき、ひどく心打たれましたが、そこに書かれてあることはそのまま、わたしたちの生活の舞台でした。

この世は言葉で形作られている

きょうの話のテーマは、「言葉に出会ううれしさ」です。この「うれしさ」は、驚きや悲しみ……などと置き替えてもよい言葉として受け止めて下さい。

先ほど、「言葉と現実の境目も分らない」と言いましたが、実はこれはすべてにあてはまる、言葉の力でもあります。現実、言葉によって色づけされて語られる、ということ。例えば、カッパの赤ちゃんを身ごもった話、似たような例が有名な『遠野物語』にもあります。そこでは、生まれた赤ちゃんの手に水掻きがあり、見苦しい姿をしていたので殺して土に埋めた、とあります。さらに女性には夫があり、別の何某がひそかに女性のもとに通っているといううわさもあつたというわけで、これはきっと、不義の子を身ごもったため、その家柄に傷がつかないようにカッパの話として処理したということを示唆しています。今ではカッパは絶滅しているから、こんな話は成り立たないし、だいいち、殺して埋めた、は通用しませんね。

改めて言うと、この世は「言葉」を通して語られる。問題は、その言葉が現実を正確に言い当てているかどうか、あるいは現実を気持ちよく説明しているかどうか、ということ。以上のことを一般的に言い直すと、次のようになります。

⑦ 現実―変化しつづける、諸行無常。
⑧ (それを表す) 言葉―レッテル化し、変化しにくい。

⑦⑧の間にはずれが生じる。(初めからずれをねらった言葉もある)。早い話が、私の名前は「林

嗣夫」、80年前から同じです。ところが本体であるこのわたしは、赤ちゃんから白髪の老人にまで変化しつづけました。だから今ここに立っているわたしを表現するには、「林嗣夫」という名(言葉)だけでは不十分だということですね。

これは、例えば「桜」でも同じこと。今日の前にある桜は、伝え聞く「桜」(意味)とはいくぶんずれたもの、一回限りのいのちとして花開いています。上林暁は、ある日、ある場所での桜を、「梢に咲いてゐる花よりも、地に散つてゐる花を美しくおもふ」と表現しました。これは、戦時中、国のためにいさぎよく散れと美化された「同期の桜」とは違いますね。現実の花びらを見つめていきます。また俳人野澤節子は、ある時ある場所での一回限りの桜を、「さきみちてさくらあをざめゐたるかな」と表現しました。一期一会の桜です。自分にとっての真実を言い当てたとき、人人の胸をうつ言葉となるのです。



さて、表題の「言葉に出会う」をまとめると―

安定しているはずの上記⑦⑧の関係がずれたり、こわれたりしていることに気づいた時、新しい言

葉を求めはじめ、これがわたしたちの創作活動です。⑦⑧の関係が生き生きと結びつき、世の中を照らす言葉にたどりつく、あるいは自分の生を支え、一日一日を響かせる言葉と出会う、これがわたしたちの目指すところです。

新しい言葉に出会うために

新しい言葉に出会うための、いくつかの心構えについて。

①一言でいえば、時に立ち止まって、知りつくしているはずの目の前の物事を、初めてのものとしてもう一度見つめ直す、これは何だろう、と問い直すこと。伝え知る名前や説明、利用価値などはちよつと横へ置いて、そのものの実在としての様相、色や形や香り、そこに在ること自体のおもしろさ、不思議さ、うれしさなどを味わってみる。自由に想像力を働かせてみる。震災などで全てを失った時、人でも物でも、そこにいる(在る)だけでいい、それだけでうれしいと感じるのではないだろうか。

ともすれば視野に入りにくい、小さなもの、弱いもの、無価値だと言われているものに目を止めてみることも大事です。よく観察すると、思いもかけない不思議や輝きを発見するはず。②目の前にあるものを、いのち(精神)あるものとして語りかけてみる。擬人法と言われるものですが、単なる技法を超えて、世界のとらえ方を「もの」から「いのち」にかえてみる。古代に

おいては山や川、動物や植物、すべてのものに神が宿ると考えていました。日ごろ使っている茶わ

んや箸、針などにも霊が宿っていました。アミニズムと言われる世界観ですが、これは決して愚かな考え方ではなく、時代に応じた生きる知恵だったのです。現在ではすべてを「消費材」と考える、人間さえも使い捨てになりかねない、これでいいのかどうか。

〈詩「洗濯ばさみ」朗読〉

以上のことと関連しますが、ものごとを科学的にとらえようとする傾向の強い現代、それらを「愛の物語」として書き直すことはできないか、ということ。科学においてはこの世界を、酸素や炭素、鉄などの物質の結合、あるいはその運動やエネルギーとして語られますが、あつさり言ってしまう、これは色も香も情緒もない無味の世界です。これだけでは人間は生きられません。

例えばサンタクロース。胸おどらせて待つ子供に、これを科学的に正しく説明する親がいるでしょうか。(いってもかまわないが)。多くの人は無意識のうちに、あの何ものにも代えがたい驚きや喜びの経験が、生きる上では大事な真であることを知っているわけです。これはもちろん、科学を軽んじるということではありません。

神神の愛と怒りの物語である神話から、科学へとたどりついたわたしたち。今度は科学から、科学の上に立つ万物の一期一会の愛の物語へと一歩踏み出せないか。いまそんなことを胸に置きながら、詩作を試みているところです。

〈詩「柿」朗読〉

*以上は、黒潮町の上林暁文学館における企画展「林

夫・詩の世界」にあわせて、17年12月2日(土)に講演した内容を、すこし言葉を添えながら文章化したものです。

資料

柿

庭のかたすみ
熟した洪柿が落ち
つぶれて緋色の果肉をさらしていた
激しいできごとの後の
しずけさで

頭上の枝枝には
まだ熟しきらない幾つもの柿が
心配そうに下を見おろしている
大丈夫
あなたたちの落下を支えるために
大地はいつも
手を広げて待っているんだよ
そんな詩人の声も聞こえてくる

ところが
つぶれた柿へ一歩近づいた時
黒い美しい蝶が
ひらひらひらと飛び立った
柿のそばに身をひそめていたのだ

そうか

そのような月日が流れてきたのだ

柿はこの蝶に会うために
初夏の若葉
花

そして実をつけ
重さを養い
渋を甘みに変え
ついに落下して
思いの傷口そのものになったのである

蝶も

この日を待ってたずねて来た



第十三回上林暁忌短歌大会

特選に秋沢さん(黒潮町)など三名が!

昨年7月22日(土)に、「第十三回上林暁忌短歌大会」が黒潮町保健福祉センター大ホールで開かれ、県内外から60名(応募数91首)の方々出席がありました。

大会は、午後一時開会、ただちに東京からお見えの大島史洋先生(結社「未来」選者、運営委員

長)に、「歌の交差するところ」と題してご講演と作品の講評をいただきました。次いで、上林曉賞等の入賞作品の発表が行われ、特選には秋沢香代子(黒潮町)、窪田詩都子(四万十町)、橋本生子(四万十町)の三氏の作品が選ばれました。特選以外の入賞作品、植田馨賞一首、秀作五首、佳作十首をふくめ十九首の作品が選ばれています。

●● 大会入賞作品 ●●

◆特選

非常用防災セット備えるもひとつ気になる吾の萎え足
黒潮町 秋沢香代子

雑踏の一人となりて一票の格差を思ふ東京駅に
四万十町 窪田詩都子

亡き母の懐かしき字のレシビ見て今年も漬けし薤五キ口
四万十町 橋本 生子

◆植田馨賞

ほととぎすの声を聴きつつ熟れし梅八キ口余りを塩漬けにせり
四万十町 林 明子

◆秀作

パソコンもスマホもできぬこの指がおはじきなれば生きいき動く
高知市 坂本 瑞枝

農に嫁し農で生抜く米寿なりこの硬き手をしみじみとみる
四万十市 宮本 操

横断歩道渡り終えたる男の子おじぎして去る紫陽花群れて
黒潮町 谷脇 巴

収穫の辣蕪切りに励む姉昭和一桁の世代は強し
黒潮町 澳本 幸美

夕されば野焼の煙あかかと種蒔く時ぞ田を耕さむ
土佐清水市 池 英夫

◆佳作

去年をかぎりと思ひしに再びを桜花の下辺を歩むよろこび
四万十市 朝日 照代

もつと上もすこし横など言わずとも賢しき孫の手痒みに届く
南国市 岩貞健一郎

「これだけで幸せだね」と五千歩を友と歩みし四万十の川辺
四万十市 植村 誠子

一瞬の光追いかけて視野検査受ける私はコメントハインター
土佐清水市 下田 佳子

焼き加減なかなかいいね目玉焼ほめて育てる夫の手料理
高知市 上田 昭子

貨物船ながき汽笛を鳴らしつつ故郷の沖を過ぎ行かむとす
土佐清水市 下田 浩

焼け跡に亡祖父の植ゑたる鳳仙花爪を染めにし戦後の日々よ
四万十市 野田 尚子

みどりごの名前は清太風そよぐ里の苗田に蝌蚪孵りいつ
四万十町 川上 理恵

梅雨晴の今日は北山緑冴え初夏のにおいを送り来る風
高知市 柿内 春代

幾許もなき命なる義母は夫の昔話しにふふと笑ひぬ
高知市 中山 恭子



講師・大島史洋先生の講演



2017年度 主な催し物

文学館企画展

■第24回企画展 「あやに愛しき」

↳ 病妻繁子との切なき日々をつづりて

期間 4 / 1 ~ 6 / 25

■特別企画展 「世界の果てのこどもたち」

↳ 北幡・満州開拓団の記録

期間 7 / 1 ~ 9 / 24

■第25回企画展 「林嗣夫・詩の世界」

↳ 言葉を自らの現実の中で語り直すとき

期間 10 / 1 ~ 12 / 27

■第26回企画展 「文芸誌『大形』とともに」

〜創刊から52年、300号の歩みをたどる〜

期間 〈2018〉 1/6〜3/25

文学館・顕彰会など

◇第13回上林暁忌短歌大会

(詳細は、3・4面参照)

◇上林暁文学講座 (レクチャーホール/会議室)

*第一回 8/5 (土) 14時〜16時

「満州開拓団の記憶をたどる」

講師 武田邦徳(元団員)、林大介(遺族)

コーディネーター 楠瀬慶太(新聞記者)

*第二回 10/8 (日) 13時半〜15時半

「暁晩年の家族と隣人」

講師 大熊平城さん(暁の孫・川崎市在住)

*第三回 12/2 (土) 14時〜16時

「言葉に出会う楽しさ」

講師 林 嗣夫さん(詩人・高知市在住)

◇上林暁の作品を読む会 (会議室/14時〜16時)

*第17回 6/17 (土) 「スケッチブック」(全集6)

*第18回 8/19 (土) 「晩春日記」(全集5)

*第19回 11/18 (土) 「ちちははの記」(全集2)

*第20回 2/17 (土) 「天草土産」(全集1)

◇第28回あかつき賞表彰式

日時 3/3 (土) 14時半〜15時半

会場 あかつき館レクチャーホール

◇劇団「the・創」演劇公演

『びったれの証(あかし)』—上林暁の生涯—

日時 10/7 (土) 14時半〜16時半

10/28 (土) 14時〜16時

会場 黒潮町・ふるさと総合センター

高知市・春野文化ホールピアステージ

黒潮町立大方・佐賀図書館

□夏休み映画上映会

日時 8/6 (土) ①10時半〜 ②14時〜

場所 あかつき館レクチャーホール

作品 「ムーミン谷の夏まつり」

「日本昔ばなし」

□秋の名画座「あかつき」

日時 11/11 (土) ①10時〜 ②14時〜

場所 あかつき館レクチャーホール

作品 「ふしぎな岬の物語」「続・深夜食堂」

□人形劇団ブーク公演

『ハリネズミと金貨』& 『ふしぎな箱』

日時 7/9 (日) 14時〜15時

会場 あかつき館レクチャーホール

□第17回にがおえ・イメージ・感想画コンクール

展示 2/12〜3/11 (大方図書館)

会場 あかつき館町民ギャラリー

表彰式

日時 3/4 (日) 14時半〜15時半

会場 あかつき館レクチャーホール

第25回企画展 「林嗣夫・詩の世界」

〜言葉を自らの現実の中で語り直すとき〜

〈期間〉 10/1〜12/27

第十七詩集『そのようにして』で、第49回日本詩人クラブ賞を受賞した林嗣夫。その詩人としての五十年の歩みを多くの詩集やエッセイ集、絵本などを展示し紹介する。



〈ひとこと〉

*ピユアでシンプルな言葉だと思っています。

(高知市・Tさん)

*郷愁を覚える素朴な詩の数々…、言い尽せませんが、一人良い時間が過ごせました。

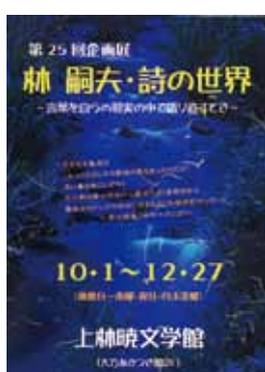
(宿毛市・Oさん)

*大量の詩に驚き、手描き絵本もすてき。

(四万十市・Tさん)

*先生の優しい文学を楽しく拝読させていただきました。素晴らしい。素晴らしい。

(高知市・Oさん)





あかつき館 * 催し点描

文学館特別企画展

『世界の果てのこどもたち』

～北幡・満州開拓団の記録～

〈期間：7/1～9/24〉

旧十川村、江川崎村など北幡地域の人々の戦中から戦後にわたる悲惨な歴史の記録「満州開拓団」の遺品や手紙、写真、絵画などの資料を多数展示。

あわせて、その事実をもとに描かれた中脇初枝さんの作品「世界の果てのこどもたち」の関連資料も展示。

1200名を超える方々に観覧いただいた。また、期間中の8月5日には、元団員や遺族、高新記者による文学講座「満州開拓団の記憶をたどる」も開催された。



第26回企画展

『文芸誌『大形』とともに』

～創刊から52年、300号の歩みをたどる～

〈期間：2018・1/6～3/25〉

大方町（現黒潮町）公民館の「文学学級」から生まれた文芸総合誌『大形』、その創刊から52年、300号の歩みをたどる。『大形』バックナンバー、創刊当時の資料や写真、同人たちの歌集、句集などが多数展示された。



文学館&町民大学

劇団「the・創」演劇公演

『びったれの証（あかし）』

～上林暁の生涯～

高知市の劇団「the・創」による演劇『びったれの証』が、10月7日（日）午後2時からふるさと総合センター大ホールで上演された。町内、外からつめかけた250名を超える上林ファンたちでホールは満席に近い盛況ぶりだった。舞台上で演じられる上林暁の生きざまに、涙と笑い、そして感動の二時間であった。

さらに10月28日（土）には、高知市「春野文化ホールピアステージ」でも公演があり、400名近い観客がつめかけた。

～短歌二首～

▽地に散りし花の美を知る上林暁（かんばやし）その生涯の舞台幕開く

▽“びったれ”の生きざま熱く伝はりて春野ピアステージ満席の拍手

叶岡 淑子さん
（「海風」短歌会同人）



館長日記

～プロゲ『クジラのあくび』より～

La Boda de Luis Alonso 2017.12.04

午後六時半開場、六時頃には続々と聴衆がやってくる。日も暮れ、外は暗い。月もまだ高い梢の下にある。あわてて駐車場から入口までの通路両脇に、電子キャンドルを並べていく。20個ばかりのキャンドルに彩られ、光の通路があらわれる。

七時開演、「松田弦・ギターリサイタル」は、211席のレクチャーホールがほぼ満席状態。ニューアルバム『ever GrEeN』の発売に合わせ、欧州公演を皮切りに日本各地をコンサートツアー中だとか。

すばらしいテクニックで強く印象に残ったのは、『ルイス・アロンソの結婚』（作曲：ヘロニモ・ヒメネス）。長岡克己作曲『白雨』『雲』のやさしいメロディーも心地よく胸に響く。『エヴァーグリーン』『ブエノスアイレスの夏』のアンコール2曲を含め二時間余、ソロギターの華麗なテクニックと調べにたっぷり酔いしれる。

懐かしいピアノとの再会 2017.10.20

町内出身のメゾソプラノ歌手・志田理早さんから、『海辺の音楽会』のチラシが送られてくる。11/5（日）開場13:30、開演14:00、歌とピアノのコンサートが予定されている。手紙には、こう記されていた。

『夏の帰省の際に会場の下見に行きました。ホールの片隅には、イスやテーブルと重なり合って、古いアップライトピアノが置かれてありました。館長にお伺いしたところ、伊田小学校が閉校した際に、比較的新しかったピアノは上川口小学校が譲り受け、上川口小学校にあった古いピアノは、大方あかつき館へ寄贈されたとのこと。

弾いてみると、聞き覚えのある優しい音がしました。まさか、この会場で母校の小学校のピアノに出会えるとは・・・

地元で演奏会をしたいと願いつつも、付きまとう不安や覚悟の足りない私でしたが、背中を強く押しもらいました。』